



野田建築会会報 2012 秋号

NAA NEWSLETTER 12 AUTUMN

VOL.28



野田建築会第8回定期総会報告

会長 五十嵐 洋也 (1998年(昭和53年)卒)

第8回定期総会が、総会員数の1/60(97名)以上の参加(出席者+委任状=206名)を得て、平成24年5月26日(土)午後2時より野田校舎講義棟K402号室にて行われました。



第1号から第4号議案(事業、会報、名簿および情報部会の平成22年度、23年度事業報告と平成24年度、25年度の活動計画案)までが一括審議され、了承されました。

第5号議案(平成22年度、23年度決算報告・会計監査および平成24年度、25年予算案)について審議し、了承されました。

第6号議案(野田建築会会則の改正について)が審議され、了承されました。

第7号議案(任期満了に伴う役員改選について)が審議され、了承されました。

その他 理工学部50周年記念行事について

山崎晃弘副会長より「東京理科大学理工学部50周年記念事業」に当会も積極的に参加する用意があることが発言された。記念事業は、2018年(平成30年)が想定されております。

第5号議案 平成22年度、23年度決算報告・会計監査および平成24年度、25年予算

<決算>

	2010年(平成22年度)		2011年(平成23年度)	
前回繰越金	2,286,653		2,259,195	
収入	837,072		834,046	
年会費	148人	444,000	143人	429,000
卒業生入会金	115人	345,000	135人	405,000
総会懇親会参加費	48,000		0	
その他(利息等)	72		46	
支出	864,530		1,090,110	
一般経費	864,530		1,090,110	
次期繰越金	-27,458		-256,064	
当期残高	2,259,195		2,003,131	

<予算>

	2012年(平成24年度)		2013年(平成25年度)	
前回繰越金	2,003,131		2,093,631	
収入(会費300人)	900,000		900,000	
支出	809,500		822,500	
名簿部会	0		0	
情報部会	103,000		96,000	
会報部会	636,500		656,500	
事業部会	60,000		60,000	
会計	10,000		10,000	
次期繰越金	90,500		77,500	
当期残高	2,093,631		2,171,131	

第7号議案 第8期役員(2012~2013年(平成24~25年)度)

会長	五十嵐 洋也	(1978年(昭和53年)卒)
副会長	山崎 晃弘	(1976年(昭和51年)卒)
事務局長	瀬沼 央	(1978年(昭和53年)卒)
会計	齋藤 喬	(1970年(昭和45年)卒)
監査	熊井 和雄	(1979年(昭和54年)卒)
	鈴木 治文	(1972年(昭和47年)卒)
(部会)	森下 誠	(1974年(昭和49年)卒)
	事業部会	菊地 利武 (1971年(昭和46年)卒) 高安 重一 (兼任)
会報部会	涌井 栄治	(1985年(昭和60年)卒)
名簿部会	山崎 晃弘	(兼任)
情報部会	高安 重一	(1989年(平成1年)卒)

第6号議案 野田建築会会則の改正内容

原文	改正文
第2章 会員 第4条(会員区分・資格) <略> (1) 普通会員: 東京理科大学工学部建築学科第5期のうち野田校舎卒業生、理工学部建築学科卒業生及び理工学研究科建築学科選考修了生 (2) 特別会員: 普通会員以外の東京理科大学理工学部建築学科教職員ならびに元教職員及び本会の趣旨に賛同し、かつ役員会で承認されたもの	第2章 会員 第4条(会員区分・資格) (略) (1) 普通会員: 東京理科大学工学部建築学科第5期のうち野田校舎卒業生、理工学部建築学科卒業生及び他校から入学した理工学研究科建築学科選考修了生 (2) 特別会員: 普通会員以外の東京理科大学理工学部建築学科教職員ならびに元教職員及び本会の趣旨に賛同し、かつ役員会で承認されたもの
第5章 役員 第15条(組織) 本会は、役員会、事務局を置く 役員は、会長、副会長、幹事並びに常任幹事、事務局長、監査役とする	第5章 役員 第15条(組織) 本会は、役員会、事務局を置く 役員は、会長、副会長、幹事並びに常任幹事、事務局長、 <u>会計</u> 、監査役とする
第17条(幹事、常任幹事) <略> (2) 幹事は、普通会員のうち各期生ごとに1名以上及び理工学研究科建築学科専攻修了生から各1名以上を選出し、定期総会で承認する。<略>	第17条(幹事、常任幹事) <略> (2) 幹事は、普通会員のうち各期学部生ごとに1名以上を選出し、定期総会で承認する。<略>
<該当なし>	第19条(会計) 会計は2名とし、幹事の中から役員会で選出する。会計は、本会の会計を行う。
第19条(監査役)	第20条(監査役)
第20条(罷免)	第21条(罷免)
第6章(役員会) 第21条(役員会) 役員会は、会長の招集により開催し、会長、副会長、幹事あるいは常任幹事、事務局長、監査役及びで構成する。	第6章(役員会) 第22条(役員会の構成) 役員会は、会長の招集により開催し、会長、副会長、幹事並びに常任幹事、事務局長、 <u>会計</u> 、監査役及びで構成する。
第22条(役員会の決定事項) <略>	第23条(役員会の決定事項) <略>
第7章 事務局 第23条(執務機関) 本会の円滑な運営を目的とし、役員会の下に幹事により構成される事務局を置く。事務局には以下の部会を置く。 (1) 会計部: 会計に関する事務を行う。 (2) 庶務部: 名簿作成、連絡、総会、渉外等に関する事務を行う。	第7章 事務局 第24条(執務機関) 本会の円滑な運営を目的とし、役員会の下に幹事により構成される事務局を置く。事務局には部会を置く。
第8章(会計) 第24条(会計経費) <略>	第8章 会計 第25条(経費) <略>
第25条(決算及び会計監査) 会計部は、会計年度の終了後決算報告をし、監査役の会計監査を受けなければならない。	第26条(決算及び会計監査) 会計は、会計年度の終了後決算報告をし、監査役の会計監査を受けなければならない。
第26条(会計年度)	第27条(会計年度)
第27条(予算及び決算の承認)	第28条(予算及び決算の承認)
【運営細則】 (3) 親睦会の主催は、前回総会で指定された卒業年度が担当する。	【運営細則】 (3) この細則は、2012年5月26日から施行する。

会長就任挨拶

野田建築会会員の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

今年度、第8回野田建築会総会にて会長の任につきました1978年(昭和53年)卒の五十嵐洋也です。野田建築会は、1998年(平成10年)5月16日に発足し、会員数は5,777名(本年3月現在)となりました。定期総会は、隔年5月に開催しており、すでに15年目に入ったこととなります。

日頃より、会員の方々、教室会議、教授、助手の方々には大変お世話になっております。感謝すると同時に、これほどの会員数を擁する会の継続と発展の一役を担う使命を全うする覚悟しております。

◆発足の経緯

設立の礎は、1995年(平成7年)に退職された上原孝雄先生

が、退職金の一部を設立資金に当てて頂いたことから始まりです。その後、2005年（平成17年）に退職された渡邊俊一先生のご尽力により発足の運びとなりました。

本会の目的は、「会員の親睦をはかり、会員の研鑽を相互に支援して、建築文化の発展に寄与する」（会則より）ことです。また、現役の学生諸君に、社会人の側から有益な情報を提供することも念頭に活動を始めました。

◆各部会の活動

発足時より、名簿発行、会報発行、OBと語る会、建築見学会、NAA賞といった軸となる活動を続け、その後、NAAサイト運営、メールマガジン発行、築理会との交流といった活動を立ち上げました。私は、事業部会長として当初より参画させていただいておりました。これらの活動は、はじめは試行錯誤でしたが、幹事や学校関係者の方々の尽力で年々質が高まってきていると自負しております。

・事業部会

会員（卒業生）同志または現役学生と会員とのイベントを企画し、実行してきました。

OBと語る会の開催 原則年2回、2名の卒業生に講師になっていただき、現役学生と交流をする。

建築見学会の開催 卒業生のコネクションによる建物あるいは工事現場を見学する。学生の参加者が多い。原則年1回。

NAA賞の授与 教室会議で、成績優秀とは違うが、優秀な学生を選出してもらい、賞を授与する。副賞は毎年、好評の照明スタンドです。

懇親会の開催 2年1回の総会の後、会員相互の懇親を深めるために行う。総会を野田校舎で行う場合は、学内の見学会等を開催する場合もある。

OBと語る会は、すでに13回におよび、講師の方々は、30名を越えています。（当初は、5名の講師ということもありました。）講演の後、簡単な料理と飲み物で卒業生と学生がまじしく語り合う様は、同窓会活動ならではの光景と言えるのではないのでしょうか。

・名簿部会

発足時より重要な活動のひとつとして位置づけ、できるだけ正確な情報を載せることを目標として2年に1回のペースで発行しました。2002年（平成14年）、2004年（平成16年）、2006年（平成18年）には、築理会（工学部建築学科同窓会）との合本名簿を発行するにまでに至りました。しかし、残念ながら、名簿発行は個人情報保護法との関係で、この2006年（平成18年）を最後に休止しました。

名簿は休止中ですが、現在の5,777名から毎年の会員は、100余名ずつ増えます。また、会報の発行やイベントのお知らせ、会費納入の確認など、名簿の正確性をますます高くする必要があります。名簿の整理は、何人かで分担してできる作業ではないため、名簿担当の方にはご苦労をかけています。

・会報部会

これも、発足当時より重要な活動として位置づけているものです。年2回、春と秋に発行する会報は、当初より質、量ともに高いものになりました。発刊当時は、まったくの試行錯誤で、担当者のご苦労には頭が下がる思いでした。そして、歴代の会報部会長のアイデアと行動力によって現在の形に発展しました。現在でも、会報の発行には多くの人が携わるので、足並みの乱れが担当者を悩ませるようです。（申し訳ありません）

すでに、今号は28号になりました。会報の記事は、卒業生の動向を中心に、大学の研究室や学内のイベント、先生方の動向や事業部会の出来事などが載せられています。読み応えのある会報になっていると自負しております。

一方、会報発行費用は、会員の増加とともに多くを占めるようになってきました。せっかく良い会報を作っても送付できないことになるのではないかと心配する状況です。

・情報部会

野田建築会の新しい活動として、2006年（平成18年）よりNAA-NETを開始しました。また、メールマガジンも開始しています。メールマガジンは、ほぼ毎週、学生や会員からの記事を発表しています。メールマガジンを受けるには、NAA-NETに登録が必要です。インターネットが生活の基盤になり、当会も情報発信の方法を模索しています。会報やメールマガジンからの誘導で、NAA-NETを充実してゆき、会報と肩を並べる情報発信源としてゆく方針です。

◆今後の課題、将来へむけて

しかし、これらの活動が、会報発行部数やメールマガジン発行数の伸び悩みから見て、OBの間に広く知られていないのではないかと懸念されます。残念に思うとともに責任を感じております。また、もうひとつの悩みは、会費をいただいている有償会員の減少です。会費の減少は、活動の消極化になりかねません。

今後は、野田建築会の発展のために、年度幹事会の見直しやOB会活動への勧誘といった内部組織の充実と、大学との連携強化やOB会活動の公開・開放といった外部との繋がりも必要と感じております。そして、現役の学生へのアピールをますます充実してゆきたいと考えております。

野田建築会のますますの発展のために、力を尽くしてゆきます。皆様方には、叱咤、激励、アイデアをいただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

最後になりましたが、いつもご協力いただいている衣笠先生、水野先生、小林先生、今後ともよろしくお願いいたします。

奥田宗幸先生に名誉教授の称号が授与されました

平成24年6月15日付けで、奥田宗幸先生に東京理科大学名誉教授の称号が授与されました。

奥田先生は昭和49年11月に助手として着任、平成4年には教授となり、36年間におよぶ教育活動への貢献は多岐にわたります。また学科主任、研究科幹事を歴任されるなど学科運営にもご尽力されました。

先生の研究分野は、建築計画学における設計方法と人間工学であり、研究活動においても多大な功績を残されています。パターンランゲージやCADを活用した設計支援システムの開発、可動床をもつ住宅の提案や開発、工業化住宅の提案、居住空間としての地下室活用方法の提案など数々の開発や提案をされてこられました。研究の成果の一部は、寸法に関する事典やハンドブックとしてまとめられ、建築の分野だけでなくインテリアの分野の人々にも貴重な資料として活用されています。また設計競技への参加や実施設計の指導など、設計教育にも熱心に取り組まれ、研究室の卒業生の中から多数の建築家を輩出されました。



OB と語る会レポート (2012年6月26日)

中村 裕幸 (なかむら ひろゆき)

1952年 群馬県渋川市生まれ
東京理科大学大学院理工学研究科(川越研究室)修了
1978年 清水建設入社(技術研究所) 防災/耐火設計および工法開発
1984年 英国環境省火災研究所招待研究員
1986年 建築本部(大使館グループ)
1988年 施工技術開発統括部長: 早期退職
現在 株式会社 DCMC および株式会社 woodinfo 代表取締役
ビジネスコンサルティングと森林及び木材流通改革に取り組む

中村さんには、「武器を持つ」というテーマでこれまでのお仕事話を語っていただきました。その言葉の通り、様々な局面で常に問題点を探って新しい武器を手に入れる、力強い半生でした。

理科大では川越研究室で防耐火工法の開発に携わり、清水建設入社後は超高層ビルから歴史的建造物のリノベーションまで、さまざまな建物の耐火パネル設計や火災気流解析に取り組みました。多変量解析やPCなど、当時まだ稀だった手法や道具を用いた研究は、1983年のジュネーブ協会火災賞に実を結びます。

この賞の審査員だったトーマス博士に招待を受け、イギリスの火災研究所に滞在した際に身につけた武器が、英語でした。帰国後はこの英語力を生かして、大使館の工事を担当するようになりました。

そして、現場に携わるうちに、朝一番にトラックがゲートに集中するような物流のシステムを改善する必要があります。早稲田大学との共同研究で、下請企業が重層する既存の系列システムに対し、フラットな企業の連合による生産のシステムを提案し、物流や職員を事業所で共有して効率化することで、バブルが崩壊して大規模なプロジェクトが減っていく中で、小規模なプロジェクトでも利益を出せるようにしていきました。

このときのロジスティクス研究を発展させ、森林から利用者までの木材の流れをつなぐ木材トレーサビリティシステムを開発し、それを機に独立して会社を設立します。さらに最近では、森林に関わる情報を管理するために、3Dレーザースキャナーを使って森林の三次元データを作成するソフトの開発にも取り組んでいるそうです。

まるでわらしべ長者の話でも聞いているような気になりますが、一つの分野で成功してもそれに安住することなく、手にした武器で別の世界に果敢に飛び込んでいく姿勢に学生たちも感動したようで、懇親会でも輪になって中村さんの熱い語り口に耳を傾けていました。



上 研究員として過ごしたイギリスの火災研究所
右上 プロジェクト会議の一角
右下 森林の三次元データ測定



とりやま あきこ

1978年 東京都小平市生まれ
東京理科大学大学院理工学研究科(初見研究室)修了
2003年 スターツ株式会社入社 設計部
2006年 独立 一級建築士事務所あとりえ設立
現在に至る

とりやまさん初見研究室の出身の若手建築家です。今回は、あたたかみのあるスケッチやスライドを交えて、現在運営されている事務所「あとりえ」の活動と、卒業直後から現在まで関わっている「築地場」についてお話いただきました。

最初に事務所の中の様子を紹介してくださいました。事務所のスタッフだけでなく、間借りしている個人の建築家、別の仕事をしている御主人、インターンの学生や、一日職業体験のツアー客までもが一緒になって楽しみながら仕事をしているなど、やかな雰囲気が伝わってきます。

続いてスライドで見せてくれた作品は、特に窓の切り取る風景や、家の中に設けられた縁側のように腰かけられる段差がつくる空間が魅力的でした。学生時代からエスキースの先生をクライアントだと思って、いかにしてその希望に答えつつ自分の発想を伝えていくか考えていたというとりやまさん、その努力が今の魅力ある作品に結実しているのでしょう。

築地場とは、とりやまさんが社会人1年目のときに、初見研のOBと学生が共同で、細い路地の奥にある惣菜屋の建物をリノベートしたシェアハウスです。社会人が出資し、学生が手を動かして作りあげた空間を作業場や住居として共同使用していて、今でもとりやまさん一家はこの一角にお住まいだそうです。当初は初見研の東京スタジオとしても使われていたようですが、携わったメンバーが社会に出て、ライフスタイルや家族構成が変化していくにつれ、使い方も変化しているようです。最近では子供連れの様々な職業の人が集まって、大人も子供も楽しめるイベントを催したり、子育てのために必要な改造をセルフ改装大会として計画したりしているそうです。

2008年に結婚されて2010年に長男を出産し、現在とりやまさんは母として、建築家として、忙しい毎日を送っているようです。今回の講演にもご主人とお子さんが応援に来てくれましたが、もし機会があれば、ぜひ今度は家庭と仕事を両立する工夫についても語っていただきたいところです。



事務所でのくつろぎのひとつ



設計した住宅にて



築地場の改装風景



最近の築地場のイベント

助教紹介

アルゴリズム的思考の探求と建築の実践



柄沢 祐輔 (からさわ ゆうすけ)

1976年 東京都生まれ
 1999年 慶応義塾大学環境情報学部卒業
 2001年 慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科建築・都市デザインコース修了
 2001～2002年 慶応義塾大学 SFC 研究所研究員
 2002～2003年 文化庁派遣芸術家在外研修制度にて MVRDV (蘭) に在籍
 2004～2005年 坂茂建築設計勤務
 2006年 柄沢祐輔建築設計事務所設立

この度6月から理工学部建築学科助教に着任した建築家の柄沢祐輔と申します。出身の大学は慶応義塾大学の環境情報学部、修了大学院は政策・メディア研究科の建築・都市デザインコース(現・環境デザインコース)ですが、修了後、文化庁の派遣芸術家在外研修制度派遣員としてオランダに国費留学し、ロッテルダムの建築事務所であるMVRDVに勤務いたしました。MVRDVでは、ノルウェーの大規模港湾施設やパリ中心部の再開発コンペティションなどの数々の計画案に関わりました。帰国後、坂茂建築設計に勤務し、韓国の集合住宅や別荘など数多くの海外プロジェクトの基本設計に関わりました。

2006年に独立して建築設計事務所を立ち上げ、「アルゴリズム」を用いた設計活動を開始しました。その研究と設計の成果は建築雑誌「10 + 1」の特集「アルゴリズム的思考と建築」号にまとめられ、私自身は、同特集号の責任編集者として企画・編集を一任され、磯崎新氏や伊東豊雄氏、藤本壮介氏、MVRDVのリーダーの一人のヤコブ・ヴァン・ライス氏らと対談を行い、建築・都市設計において今後「アルゴリズム」的な方法論がどのような意味を持つか、討議を行いました。また2009年の秋には千葉県君津市にアルゴリズムを用いて「villa kanousan」という別荘建築を竣工させ、理論的な構築とともに実空間へと立ち上げる実践を展開しています。「villa kanousan」は広く海外のメディアで紹介いただき、2011年度イギリスのD & AD賞の空間デザイン部門を受賞いたしました。

また著作なども並行して刊行し、2010年には原広司、塚本由晴、森川嘉一郎さんと「アーキテクチャとクラウド——情報による空間の変容——」(millegraph 刊)を刊行し、

また2011年には「設計の設計——<建築・空間・情報>制作の方法」(INAX 出版)を共著にて刊行しました。

このように、情報技術を活用した建築の設計の実践から、インターネットなどの情報技術が浸透することによって起きている建築・都市空間の変容などのリサーチ・理論的な探求を行っています。今日では情報技術が激しい勢いで日常生活の中に浸透を遂げつつありますが、その変化の中から創作に利用できる論理を取り出し、実際の建築と都市の設計に応用することによって、今日の建築と都市のあり方をより豊かにすることができ

ばと考えています。

受賞歴

1999年 文化庁メディア芸術祭優秀賞受賞
 1999年 アルス・エレクトロニカ(オーストリア) Honorable Mention 賞受賞
 2000年 新建築住宅設計競技 2000 “ファイナルハウス・コンペティション” (伊東豊雄審査員) 優秀賞受賞
 2003年 第十三回エス・バイ・エル住宅設計競技入賞
 2010年 ベスト・デビュタント賞空間・ID部門を受賞
 2011年 イギリスD & AD賞空間デザイン部門を受賞

人命や財産を守る安心・安全な建物をめざして



佐藤 大樹 (さとう だいき)

1977年 宮城県仙台市生まれ
 2000年 東北工業大学工学部建築学科卒業
 2006年 東京工業大学博士課程修了
 2007年 東京理科大学理工学部建築学科北村研究室助教

私は、2002年3月に東北工業大学の修士課程を修了後、2006年9月に東京工業の博士号(工学)を取得し、東京工業大学COE研究員を半年間務めた後、2007年4月に東京理科大学理工学部建築学科の北村研究室の助教に着任しました。

東京理科大学に着任する前は、東北工業大学の川股先生や東京工業大学の笠井先生のご指導のもと、最先端の構造技術である制振構造・免震構造について、地震動だけでなく強風に対する動的挙動を解明する研究を行ってきました。東京理科大学の北村研究室に着任してからは、研究の幅をさらに広げることができました。具体的に例を挙げると、世界最大の振動台であるE-ディフェンスでの鉄骨構造の崩壊実験や長周期地震動による鋼構造超高層建物の破壊実験、履歴型と粘性型制振ブレースの高さ方向最適配置に関する研究、外付け制振ブレースによる制震補強したRC架構の載荷実験、免震建物の地震・風観測に基づく動的挙動の解明、超高層免震・制振建物の風応答評価法の開発、鋼構造制振建物のエネルギー法による応答評価法の開発、高強度鋼を用いた設計手法の構築、鋼製ダンパーの累積疲労評価手法の開発など、S、RC造、超高層から中低層、耐震、免震、制振構造と幅広い建築構造を対象に、理論から実験・観測まで、企業などの共同研究者にご指導を頂きながら北村研究室の学生と共に研究を進めています。

北村研究室には多くの大学院生・学部生が所属しており、学生たちはそれぞれ高い意識とパワーを持って研究に打ち込んでおります。私も学生からパワーをもらいながら、近い将来に発生することが予想されている東海地震・東南海地震・南海地震、首都直下地震などの巨大地震や巨大台風などに対し、人命だけでなく財産も守れる安心・安全な建物のあり方を提案する研究を進めて行きたいと思っております。

2011年度(平成23年度) 理工学部建築学科・理工学研究科建築学専攻 各賞受賞者

学部	卒業論文賞(一般コース)	1位	川向研	荒井隆太郎, 矢田敦士	大学院	修士設計賞	最優秀作品	岩岡研	針貝傑史
	卒業論文賞(通年コース)	最優秀	永野研	濱田孝之, 石崎忠介			優秀作品	岩岡研	佐藤久美子
		最優秀	川向研	尾田紘也, 鈴木雄也, 高橋遼			優秀作品	岩岡研	松下晃士
		優秀	北村研	渡邊重仁			優秀作品	岩岡研	向井優佳
		優秀	吉澤研	白川香苗, 原知実		修士研究奨励賞	最優秀賞	北村研	小穴温子
	卒業設計賞	(P.06 記載につき省略)					優秀賞	兼松研	榎村剛
	学業優秀賞	1位	北村研	佐藤克哉			優秀賞	北村研	添田幸平
		2位	大宮研	鈴木美香子			優秀賞	北村研	平井宏幸
		3位	井上研	五十嵐瞳	共通	NAA賞	(P.06 記載につき省略)		

2011 年度 NAA 賞報告



大館 由希子 (おおだて ゆきこ)

NAA 賞を受賞させていただいた兼松研究室の大館です。

この度は、このような名誉ある賞に選定していただき、関係者の皆様に暑く御礼申し上げます。受賞のお話を頂いた際は、驚き耳を疑いましたが、同時に大変嬉しく思いました。

本研究は、実建築物の外壁の仕上塗材を実地調査し、得られた調査データを確率過程に適用し、外壁仕上塗材の耐用年数予測手法を開発するものです。研究を進めていく中で一番工夫をしたのが耐用年数予測手法の開発です。実地調査で得られた調査データは傾向がつかみにくかったため、このデータから算出する耐用年数予測もバラつきがでてしまいました。耐用年数予測手法の実現に向け、耐用年数予測データと格闘する必要がありましたが、初めはどの様にこのデータを分析して良いのかもわからず中々進みませんでした。しかし、最終的には同じ調査データを扱っても、様々な方向から耐用年数予測データの分析を行うことができ、さらに分析方法によって異なる結果がでることが楽しくなっていました。

この一年研究に取り組んだことで、最後まで諦めずに取り組むことの大切さ、また様々な方向から物事をとらえ分析することの重要さを学ばせて頂きました。今回研究を進めていく中で学んだ多くのことを今後の人生に活かせるよう日々精進して参ります。

最後に、この1年間支えてくれた、担当教授である兼松先生、今本研究室(理工大工学部)の皆様、兼松研究室のみんな、そして家族に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

受賞理由:

大館由希子さんは、「実建築物調査に基づく外壁建築仕上塗材の耐用年数予測手法の開発に関する研究」をテーマとし卒業論文に取り組んだ。指導教官が不在の中で、早くから論文に着手し、八王子や府中に幾度となく足を運び、膨大な調査をこなした。困難な調査であり傾向がつかみにくいなか、調査結果の分析に最後の最後まで粘り強く取り組んだ。大館由希子さんの最後まであきらめず真摯なものごとに取り組む姿勢に対して平成23年度NAA賞を授与する。

2011 年度卒業設計賞報告

最優秀 輝けない都市

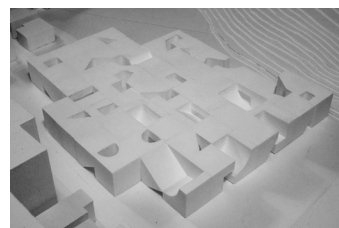
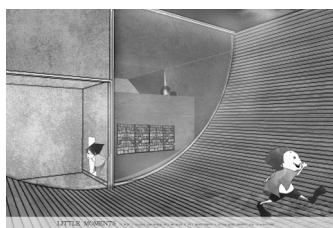
土屋 秀正 (安原研究室)

都市は輝いているのか。

敷地は東京都新宿区の新宿中央公園と都庁などの超高層ビル群があるエリア。街路を整備して完璧に自動車道と歩道を分離し、超高層ビルを建設してオープンスペースを確保している。それはル・コルビュジェが提唱した「輝く都市」という理想都市の構想そのものである。ここに21世紀の超高層、超高層群の未来像を描く。



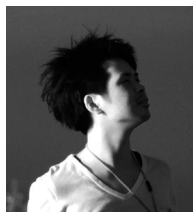
います。大きくカーブする図書館の天井、その上では子どもたちが元気に駆け回ります。隙間によってできた秘密基地のような空間。そこで遊ぶ子どもたちは先生から隠れているつもりかもしれませんが、実は隙間による開口によって図書館側から様子が伺えます。逆に保育室のロフトや屋上から子どもたちが図書館にいる人々を覗き見していることも。2つの空間は「隙間」によって繋がり、「人々の居場所」になります。



優秀 ヨウギシャのコムニタス

星 洸祐 (伊藤研究室)

司法過程のあたらしいプログラム「ヨウギシャのコムニタス」。この建築は拘留所や刑務所でも、裁判所でもない。「推定有罪の原則」と「不当な権力体験」から否認する容疑162人を保護するための建築である。一時的に恒常的な環境から離脱する点において、彼らにとっての別荘のような場所となる。そして、短期的な共同体を構築し、彼らは裁判を闘うための環境を獲得する。敷地は、東京都千代田区日比谷公園の草地広場。歴史的/政治的なポテンシャルと事実認定の原則からこの場所を選定した。拘禁の最大の問題点は、司法の闘いにもかかわらず、彼らの生物的な生に働きかけることによって、人間的な生としても闘う意思を殺いでしまうことである。よって、単純な透明性の追求ではなく、建築計画は彼らが生きるため、そして、闘うための構成となる。



設計のコンセプトは「(1)ふたつの生の分化/(2)視線と関係性の多様化/(3)ソーシャルキャピタルの獲得」。彼らは上層部で血縁者と自由に対面し、スピーカーズ・コーナーでは人々に無実を訴える。

優秀 LITTLE MOMENTS

北濱 亮子 (初見研究室)

神奈川県横浜市保土ヶ谷小学校跡地、小中学校が密集するこの地に保育施設をつくりたい。また図書館というプログラムを加えることによって、「帰って来られる保育園」をつくりたい。保育空間を軸に、子どもの「一人でいたい」気持ちを尊重し、あえて隠れられる居場所-隙間-をつくることを考えました。7000×7000(子ども20~25人あたりの保育面積)×7000のキューブから18パターンの際間を切り取り、ボリュームを組み合わせて空間をつくりたい。壁や床、天井が突き出たり、凹んだり、曲がったり、歪んだり、上がったり、下がったり、明るかったり、暗かったり、様々に変化します。保育施設と図書館の動線はそれぞれ内外部を上下左右しながら続き、絡み合



OB紹介「デジタル・スタジオの活動」-Digital Studio-

2010年前期、学部3年生の設計製図指導の後に学生達がちらほらと集まって来ました。a+uの2010年5月号にて、デジタル・ツールの可能性に関するエッセーを投稿していました時期だったからか、学生らは「デジタル・ツールをもっと設計に活用したい、どんなものから手を出せばいいか、海外ではどうなっていますか」と目を輝かせていました。毎週集まる学生が増え、それじゃあ興味のある学生を集めて勉強会でも始めようか、という事がきっかけでした。建築学科だけへの呼びかけでしたが、1年生から4年生まで55名も集まり、2010年6月、TUS Digital Studioはスタートしました。これは、まったくの有志団体でございます。しかし、2~3か月の課題を設け、正規の設計製図のように最終講評会もあります。講評会には、アルゴリズムやパラメトリック・デザインの分野で活躍中の若い建築家の方やプログラマー、ロボットやゲームのクリエイターといった他分野の方を運河に招いて行っております。最初の1年間は、3次元CAD、コミュニケーション用プログラム、ロボット用デバイスの3分野を重点的に伝えました。学生らの休みの時期と私の仕事の時期が重なる日程を選んで、2011年2月にはロサンゼルスLos AngelesのSci-arc(南カルフォルニア建築大学)、2011年9月にはニューヨークのコロンビア大学建築学部へ赴き、技術交換会を行いました。今後も学生達への技術触発の目的で、シンガポール、ドイツと続けていく予定です。

デジタル・スタジオは、ツールが本来発揮しえない機能を、改造したり組み替えたりして発見できる力を学ぶところです。現在はRhino、Grasshopper、Processing、Arduinoというツールを使って、そのパラメトリックな動作やアルゴリズムによる設計、施工物量の最適化、インターネット情報の取捨選択と応用を進めています。つまり、ごちゃまぜに使ってみてインテグレーションに挑戦しています。ツールによって可能性を限定されたものづくりは、本来のものづくりではないと思います。如何にイメージに妥協しないか、複雑なものでもシンプルに造るか、複雑性を維持するのかは、設計者がいつも追求めなければならないはず。常に環境や状況に対してアジャイルであるべきです。

学生たちは、授業が終わる夕方ごろから徐々に4階のオープンスペースに集まり、ノートパソコンを開いて先輩後輩関係なく意見を交換し、がやがやと夜遅くまでプログラムを打っています。2000年に本校を卒業した私にとっては、当時各学年はほぼ分離していて、卒業論文の間際で先輩を知るようなものでした。授業が終わると学校を離れる理由は沢山あっても、留まる理由は少なかったように思うのです。皆で協力し合うこの現象を羨ましくそして頼もしく思い、私の熱意もどんどん上がっていきました。コンピュータに向き合っているばかりではなく、模型やモックアップを作り、町を歩いまくってデータを取るような課題もあります。建築にとって、デジタル・ツールは道具でしかなく、コンピュータだけでどうにかなるんだと勘違いしている学生はいません。デジタル・スタジオ以外にも、現在野田の建築学科には他のワークショップの機会も多く、学生たちの建築学習環境は私の学んでいた時よりも恵まれていると感じています。

私がコロンビア大学留学から帰国した2003年頃の日本は、レーザーカッターや光造形機の建築教育分野での利用は注目さ



廣瀬大祐(ひろせ だいすけ)

1974年長崎県出身。2000年東京理科大学大学院建築学川向研究室卒業後、隈研吾都市建築設計事務所を経て渡米。2002年コロンビア大学大学院建築学科AADを卒業後、当校Evan Douglas教授助手。2005年アーキコンプレックス設立。2008年パリ装飾美術館での経済産業省主催「kansei」展にてアルゴリズムを用いた空間を創出。国内外でホテル、住宅、展示の設計、海外の大学で講義を行う。東京理科大学、京都造形芸術大学非常勤講師、東京大学特任非常勤講師。

れていなかったように思いますが、アジア各国の大学では、欧米から持ち帰ったデジタル・ツールやその周辺技術、設備を当時から急速に取り入れていました。私はこのような国際競争力への危機感を強く感じ、帰国後に一度本校に対してデジタル教育の強化を求めましたが、ソフトウェアの調達はどうする?設備はどうする?場所は?と様々な難関がありました。しかし、今回は発起人が学生達自らであり、その熱意がしっかりと建築学科に伝わったのだと思います。現在大学院2年生の岩切和馬君をはじめとするDigital Studioの学生達自らが様々な書類を用意し、学科の先生方々に説明を繰り返して実現に至ったのです。有志団体であるにもかかわらず、野田でここまでの活動を許されているのは、私の出身研究室でもある川向正人教授からの寛大な応援や、初見学教授をはじめとする各研究室の皆様からの賛同を頂いているからに他ありません。加えて幸運なことに、2012年7月、関東の建築教育機関では稀にみる、大型レーザーカッターが本学科に導入されました。模型に留まらず、実物の空間を造形することが期待されます。

国内の様々な大学で2010年頃から、デジタル・ツールを伴った新しい建築教育への機運が見られます。本来は、建築理論や英語能力という基礎を強化した上で、ツールを導入するのが自然だと理解していますが、逆に有志団体の良さを持ってして、海外からも注目されるような思いきった挑戦にあえて取り組んでいます。有志団体ですので、学生達が集めた資金で運営しており、今のままの体制を維持出来ても、発展は非常に険しい道とも思います。そのような中でもDigital Studioは、いわばデジタル・ツールと建築の接点に関することなら何でも学習できる国内最高レベルのデジタル建築教育団体をめざしています。最終成果物が評価対象となりがちな社会において、ぼろぼろの、やっとたどり着いた作品が、大学での活動としては幼稚であると思われてしまわぬように、内在するプロセスでの繊細な思考を図表化、英語化、プレゼンテーション化することをルールとしています。発足して早2年、すでに高度なスキルを持つ3、4年生や大学院生が出てき始め、正規の授業でも活かしており、アイデア設計競技においては連勝中でもあります。彼らが新しい建築に貢献する創造性あるものを生み出せると信じております。

最後に、まだまだ創成期のDigital Studioではございますが以下ウェブにより彼らの活動をご覧いただき、ご支援ご指導をいただければと願っております。ぜひ、卒業生先輩方々のお立ち寄りも心よりお待ちしております。

東京理科大学 Digital Studio ウェブサイト

<http://www.tusds.com>



ロサンゼルスLos AngelesのSci-arcでの技術交流会。廣瀬大祐がゲストクリエイティブとして参加した際に、Digital Studioの学生11名が同行。ロサンゼルスLos Angelesの建築視察や、Sci-arcの学生との交流も盛んに行われた。



学生達の成果物やプログラムデータをネット公開しています。オープンソースという思想に基づいて、誰にでも使っていただけることを意図しています。海外の学生から技術面での質問などが届くようになりました。

山崎晃弘(1976年卒業・上原研究室1期生・野田建築会副会長)

大学卒業後35年が経過し、各方面で活躍された同期の方々(年齢58～60)に、今こそ互いに懇親を深める時期になってきたとの思いから発案しました。過去に一度、卒業10年後に同期会を企画し、今回は2回目となります。出席者は九州や四国からの参加も含め総計22名でしたが、やはり予想通り元気のいい人ばかりの集まりとなりました。なお、二次会もほぼ全員で23:00終了でした。

私ども6期入学生は、学園封鎖の影響による学年末試験の延期等で留年を余儀なくされた者もあり(他にも理由はありますが)、卒業年は1976～1978年と違いがあるため、会の基準を入学年に設定した次第です。

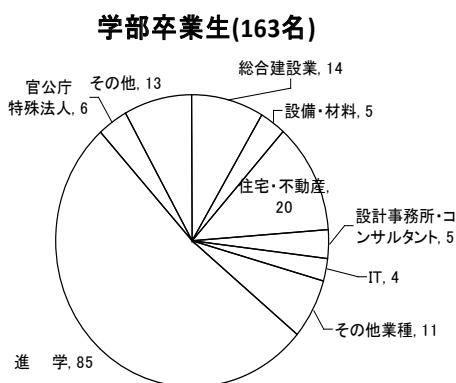
開催して嬉しかったこ

とは、近いうちに(というよりも元気な間に)また同期会をやろうという声が多くあがり、次回への弾みがついたことでした。さらに、連絡網について、多くの情報が寄せられ名簿が充実したこと、また参加できなくなった人も思いのほかフォローしてくれたことでした。

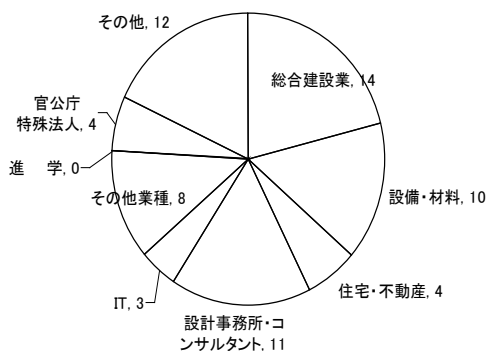
こうした会の催しは年代や時期により(性格にもより)、なかなか実行に至ることが大変でしょうが、例えば野田建築会の総会時に開催するとか、そうした方法の提案も同・役員会での大きなテーマとなっています。



2011年度
卒業生の就職先
など内定先



大学院修了生(66名)



NAAからのお知らせ

【会費納入のお願い】

野田建築会(NAA)では、会則に則って平成24年度(平成24年4月1日～平成25年3月31日)の普通会员の年会費3000円を徴収しています。会費は会報の発行、OBと語る会の開催、NAAサイトの運営、見学会の開催、NAA賞の授与などの活動費用として使われています。

NAAの発展と活動の活性化を図るために、本年度会費をぜひ、納入いただきますようお願いいたします。つきましては会費納入のための郵便振替用紙を同封いたします。

お振込みの際には、封筒の宛名ラベルに記載されているID番号を通信欄に記入願います。専用の郵便振替用紙がない方も、

ページ右下にある郵便振替口座番号から納付することができます。(メルマガ登録については連絡欄に記入してください)。

【NAAサイトのお知らせ】

NAAでは情報交換ツールとしてNAAサイト(<http://www.rikadaikenchiku.com>)を開設しています。このサイトで直接登録するか、専用の郵便振替用紙「メルマガの購読希望」欄の「する」に○印をしていただければ、大学の動向をお知らせするメールマガジン(NAAメルマガ)も届くようになります。ぜひご利用ください。

【編集後記】

表紙の写真は運河の脇に建っているカナル会館(平成18年竣工)です。以前この場所には第1体育館と第1食堂がありました。建物は3階建てで600席の食堂と大会議室があります。前号でも紹介した葛飾キャンパスの建設工事ですが、10月か11月に現場見学会を企画中です。NAAメルマガに案内が掲載されるので参加したい方は見逃さずに。(涌井1985年卒)

野田建築会 会報 12秋号

2012年10月15日

編集：会報部会

発行：東京理科大学野田建築会

〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641

郵便振替 口座番号 00130-9-27644 東京理科大学野田建築会